

愛媛における日独関係史

「青島守備軍司令部」寄贈ドイツ図書と旧制松山高等学校（後）

森 孝明

第三章 松山高等学校長の書簡

一、一通目の書簡

松山高等学校長由比質は、大正九年七月九日、陸軍次官山梨半造宛に、「青島における独逸時代の図書類分与情願の件」書簡を書いた。陸軍省主務局課が受領したこの書簡には、「発第九四号」（七月十二日）と押印してある（写真¹）。すでに述べた通り、この書簡は、『大正八年以降青島函獲書籍二関スル件』²の中に綴じられている。外部文書では、東京帝国大学総長書簡（大正八年十一月二十七日）³、東北帝国大学総長書簡（大正九年一月十二日）⁴に次いで、三番目に陸軍省に送られたもので、高等学校長書簡としては唯一のものである。先の二通と同様に、校名入りの便箋に書かれている。

大正九年七月九日

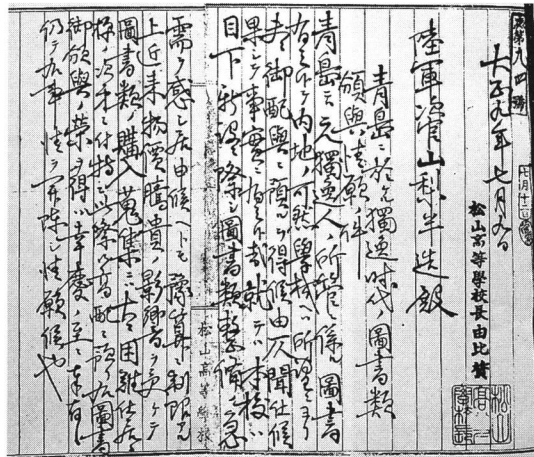
松山高等学校長 由比 質

陸軍次官 山梨半造殿

青島ニ於ケル独逸時代ノ図書類分与情願ノ件

青島ニハ元独逸人ノ所管ニ係ル図書之有リ候ニテ内地ノ然ルベキ学校ハハ所望ニヨリ夫々御配與ニ預ルヲ得候由仄聞仕リ候果シテ事実ニ之有リ候哉。就テハ本校ハ目下新設ニ際シ図書類整備ノ急需ヲ感ジ居申候ヘドモ予算ニ制限アル上近來物価騰貴ノ影響ヲ受ケテ図書類ノ購入募集ニハ大ニ困難仕居候様ノ次第ニ付、特ニコノ際御高配ニ預リ右図書御分与ノ榮ヲ得バ幸慶ノ至ニ存ジ候。仍テ右ノ事情ヲ開陳シ情願候也

校名入りの便箋に書いた公文書らしく、校長は時候の挨拶等は抜きにし、要件だけを明瞭に書いています。その書き方はしかし、両帝国大学総長の書簡のように、青島守備軍が保管している鹵獲図書の中身を承知している物言いではない。校長はまず、鹵獲図書があること及び内地のしかるべき学校へ「所望ニヨリ夫々ゴ配與ニ預ル」ことがあると「仄聞」したが、これは事実かどうかと尋ねる。「仄聞」とは、「ほのかに聞く、ちらつと聞く、うわさに聞く」（国語大辞典・小学館）の意である。誰から聞いたのか気になるところだが、「仄聞」したくらいで、校長が陸軍次官に内



(写真1)

容確認の手紙を書いたとも思われぬ。校長は情報源を明かさぬ形で事実の確認をしているようである。そして用件は、鹵獲書籍の「分与」である。なぜドイツ図書が欲しいのか。その理由は、松山高等学校が新設したばかりで、図書の整備を急ぐこと、しかるに予算が少ない上に物価が上がって図書の購入が困難であること、つまり、高等学校は出来たが本がなくて大変困っているということである。「特ニコノ際ゴ高配ニ預リ」といふ図書分与への切望が、「情願」の文字に込められていると思われる。校長の用件も気持ちもこれで相手に充分伝わる文面だと考えられるであろう。

二、二通目の書簡

ところが不思議なことに、松山高等学校長は、右の書簡と同じ日付で、同じ内容と思われる手紙を同じ陸軍次官山梨半造に宛て送っている。二通目の書簡(写真⁵)は、封筒に「親展」と書かれた巻紙の手紙である。校長はなぜ二通目の書簡を陸軍次官へ送ったのだろうか。何か書き足りないことがあったのだろうか。それとも大学と違って高等学校である故、しかも設立一年の新しい高等学校である故に、陸軍省に対して丁寧さを示そうとしたのだろうか。外部から陸軍省への書簡は皆陸軍大臣宛に出しているのに、由比校長は二通とも陸軍次官山梨半造宛に出している。それに意味があるのだろうか。高等学校では唯一松山高等学校長だけが要望書を出しているのである。由比校長は押し強い大胆な人物だと考えるべきだろうか。

二通目の文面の中に、「試みに情願書提出致し候」と書かれているところから、由比校長は、先の書簡を書いた後に、この「親展」書簡を書いたことは、間違いない。

追啓 御指示次第小生又は校内事務者を出省
せしめ又は青島に派遣することも出来可申候
間御含み相願候

拝啓 時下益々御清祥奉賀に候。嘗て拝光を得候。以
来絶えて御無沙汰に相成り謝し奉り候。然れば唐突な
がら独逸占領時代の青島の図書を大字其他の学校へ御
下附に相成候御内議之有り候様聞及びし処果して事実
に候哉。実は当校の如きは昨年創立され参考図書整備
には非常に苦心致し居り候場合に之有り候間若し何ら
かの方法にて右様の事可相願いれ候はば誠に本校のた
めに幸慶に存じ候次第に候。就いては試みに情願書提
出致し候間御多用中甚だ恐縮ながら何分の御詮議下さ
れ度奉願願候

尚、図書の種類は和漢洋其専門科別等何れにても宜
しく又欲張り候申し分には候へども一部にても多数を
希望致し候次第に候悪しからず御了承奉願候

拝具

追啓 御指示次第小生又は校内事務者を出省
せしめ又は青島に派遣することも出来可申候
間御含み相願候

拝啓 時下益々御清祥奉賀に候。嘗て拝光を得候。以
来絶えて御無沙汰に相成り謝し奉り候。然れば唐突な
がら独逸占領時代の青島の図書を大字其他の学校へ御
下附に相成候御内議之有り候様聞及びし処果して事実
に候哉。実は当校の如きは昨年創立され参考図書整備
には非常に苦心致し居り候場合に之有り候間若し何ら
かの方法にて右様の事可相願いれ候はば誠に本校のた
めに幸慶に存じ候次第に候。就いては試みに情願書提
出致し候間御多用中甚だ恐縮ながら何分の御詮議下さ
れ度奉願願候

尚、図書の種類は和漢洋其専門科別等何れにても宜
しく又欲張り候申し分には候へども一部にても多数を
希望致し候次第に候悪しからず御了承奉願候

非特 吾心 力

(写真2-1)

七月九日

松山高等学校長

由比 質

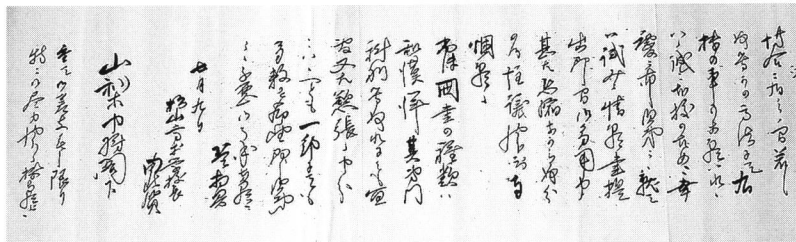
山梨中将閣下

重て御差支え無き候限り特に

御尽力被下候様奉願上げ候

最初の手紙には書かれていなかったという意味で、二通目の書簡が最初の手紙と異なっている点が幾つかある。その一つは、冒頭の「拝啓 時下益々御清祥奉賀に候」の挨拶で始まっている点である。これは用件のみの公文書の書簡とは違い、「親展」の文字が持つ個人的な関係性を示すものである。それをもっと明確にしているのが、これに続く文章、即ち「嘗て拝光を得候。以来絶えて御無沙汰に相成り謝し奉り候」である。由比較長は山梨陸軍次官と以前会ったという。二人は面識があったのである。そのせいか、文面はどこか親しそうな雰囲気を感じさせる。例えば、図書の種類は何でも良いし、欲張りを言うようですが一部でも多数を希望しますと書き、追伸で、重ねて差し支えない限り御尽力下さい、とも書いているのである。二人は一体どのような関係なのだろうか。公文書的な先の書簡では伝えにくい個人的関係を「親展」の形で伝えることに、この手紙の意味があるというのだろうか。

愛媛における日独関係史「青島守備軍司令部」寄贈ドイツ図書と旧制松山高等学校（後）



(写真 2-2)

用件に関しては、校長はここでも自分の知っていることの確認をしている。即ち、青島の図書を大学其の他の学校へ分配することが決まり、「内議」をしていると聞きましたが事実でしようかと。しかし先の書簡とは違って「仄聞」したなどと曖昧な言い方はしていない。「内議」とは公表されていない陸軍内部の評議事項に対して言う言葉である。由比校長はまだ公表されていない陸軍内部の事情を誰かから聞いて知っていることになる。では一体誰から情報を得たのだろうか。校長はこの言葉を用いることによって、陸軍省に通じている者が身近に居ることを、次官に伝えているとも考えられるであろう。

ドイツ図書分配嘆願の理由は、先の書簡よりも簡単に述べられている。「当校の如きは昨年創立され参考図書整備に苦心」していると書くにとどめている。二通目の手紙を書いたのは、この理由の補足説明をするためではない。先に書いた「情願書」に対して、ただ読むだけではなく、陸軍省の「詮議」を求める「個願」にあった。「親展」の形で実は伝えたかったのは、つまり、表からの公的書簡を出すだけで足りなかったのは、いわば裏から、つまり個人的に親しい関係を思い出させて、相手の懐に飛び込んで、願いを叶えて欲しい思いを伝えることだったと考えられる。陸軍次官山梨半造に宛て表と裏の両側から二通もの手紙を書いたのは、由比校長が陸軍次官を直接知っていたからである。手紙の冒頭にそのことをはっきりと書いて、懐に飛び込んだのである。校長は図書分配に必死である。何としても一冊でも多く欲しいのである。追伸を書き、更に冒頭の余白にまで「追啓」を書き加え、くだい位に、自ら陸軍省へ行ってもいいし、青島へ学校の事務者を派遣してもいいとまで書いている。松山高等学校に余程の事情があると思われる。

手紙の日付「大正九年七月九日」も、考えれば微妙である。というのは、青島守備軍司令部が「鹵獲書籍寄贈分配表」を作成して陸軍省へ送ったのは、大正九年二月二十七日であったが、陸軍省はそれから寄贈先の検討に入り、ま

だ結論を出していない時期であったからである。実は「分配表」の寄贈先の中に、すでに松山高等学校は第八高等学校の次に書かれ、全十二高等学校中、山口高校に次いで二番目に多い五二三冊の配分になっていた。⁽⁶⁾ 冊数からすれば、「分配表」において松山高等学校はすでに優遇されていたと考えられなくもないのである。しかし今、その寄贈先が陸軍省の手によって検討されている。寄贈先からは与えられることはないであろうか。もし由比校長が「分配表」に松山高等学校の名前が入っていることを知っていたら、そして、陸軍省が寄贈先の変更をするかもしれないと知ったらどうだろうか。陸軍省が「分配表」の修正案を作り終えたのは、大正九年七月二十三日である。しかもその修正案には、水戸高等学校が寄贈先に追加されていた。⁽⁷⁾ 七月中に結論が出そうなこと、高等学校をどうするかが話題になっていることを校長が知ったとしたら、どうだろう。七月九日の日に、陸軍大臣宛にはなく、嘗て会ったことのある陸軍次官に宛て、公文書的な情願書を書き、すぐさま同じ次官に「親展」書簡を書き直し、鹵獲図書に選ばれたためには、松山から陸軍省へも出かけると、由比校長は書いたのである。時間が迫って切羽詰まったような校長の態度は尋常ではない。陸軍省の状況を知っていればこそその校長の行動ではないだろうか。

三、山梨半造陸軍次官の返書

しかし、幸いにもと言うべきか、陸軍省の修正案は決定とはならず、それから一年半後の大正十一年二月二十日付で、大きく変更された最終案が実行されることになったのである。⁽⁸⁾ 由比校長が二通もの書簡を書いたことは効果があったのか、と問うなら、松山高等学校は最初から「寄贈先」に入れられており、最終案においても変更はなかったという点では、情願書も親展書簡も書かなくて良かったように見える。しかしながら、陸軍省から鹵獲書籍分配に関する

松山高専学校への確かな分配「予定」の回答を得ることができたという点では、校長の行動は大いに意味があったと言えるのである。というのは、陸軍次官から「拝復」の返書が校長に送られたからである。

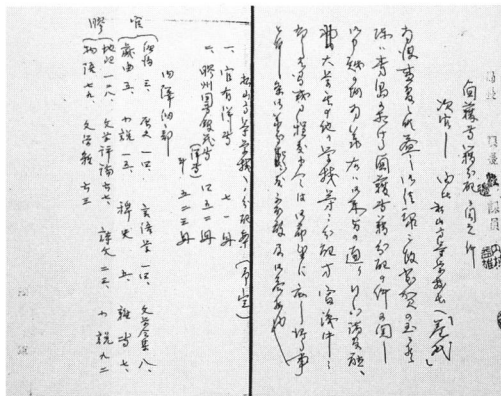
陸軍大臣宛に外部から書簡が来た場合、その返事は、副官が「回答」として公文書を書くのが通常のようなのである。例えば、東亜同文会会長子爵牧野伸顕が陸軍大臣宛に鹵獲書籍分与要望書を出したとき（大正十一年四月五日）、陸軍省は、「副官より東亜同文会会長へ回答」を書いて出している。その文案は主務局課が作成し、大臣官房へ提出される手続きになっている。それから見ると、次官自ら由比校長宛に、しかも親展書簡に対応した「巻紙」の形で、返事を書いているのは、異例のことであると考えられる。

鹵獲書籍分配二関スル件

次官 ……

由比松山高専学校長へ「巻紙」

拝復 盛夏ノ候益々御清祥ノ段奉賀ノ至ニ候
然バ青島ニ於ケル鹵獲書籍分配ノ件ニ関シ御
申越ノ事承リ候。右ハ御来旨ノ通り日々ニ諸
官庁、大学其他ノ学校等ニ二分配方審議中ニ付
候間或ル程度マデハ御希望ニ応ジ得ル事ト存
ジ候御承知下サレ度御知致及御参考也



(写真3)

松山高等学校へノ分配案（予定）

一、官有洋書 七二冊

二、膠州図書館蔵書（洋書） 四五二冊

計 五二三冊

内訳ノ部

官 經濟 三、 歴史 一四、 言語学 一四、 文学全集 八、

戯曲 五、 小説 一五、 稗史 五、 雑書 七、

膠 地理 一二八、 文学評論 六七、 詩文 二三、 小説 九二、

物語 七九、 文学雜 六三

『大正八年以降青島函獲書籍二関スル件』の中に保存されている次官の右の返書（写真3）は、もちろん直筆の下書きではなく、別の職員が作成したものである。ペンによる走り書きのような文書であるが、便箋の端に「課長」と「課員」の印鑑が押しあるところからすると、主務局課でこの文案が作成され、正式に承認されたものとして、山梨半造次官はこれを清書して由比較長へ出したものと思われる。この返書には日付が記されていないから、いつ出されたかは不明である。しかし文頭に「盛夏の候」と書いてあることからすると、七月中に出されたことはまちがいない。公的文書として保存されているのであるから、この返書が校長へ送られなかったとは考えられないのである。更に、文書の後に添付された「松山高等学校への分配案（予定）」は、「内訳の部」に列挙されている分野と冊数にいたるまで、青島守備軍司令部が作った「函獲書籍寄贈分配表」と全く同じ内容である。ここまで詳しく記してあ

る陸軍次官の返書は、由比校長の気持ちに大変丁寧に答えていると考えても良いものである。この返書の下書きの存在を見る限り、由比質校長と山梨陸軍次官の間には、単なる面識以上の関係が感じられるのである。次章においては、この二人の間にどのような接点があるかを探ってみたい。

第四章 由比兄弟と山梨半造

一、松山高等学校初代校長由比質

松山高等学校の誕生については、第五章に譲るとして、その校長となった由比質（ゆひ ただす）（一八七〇—一九三〇）の生い立ちを見ておきたい。彼は、明治三年十月十九日、土佐藩士由比光素の次男として土佐郡神田村（現高知市神田）に生まれた。⁹ 幼名を潤二郎と呼び、後に質と改めた。幼少の折に母親が亡くなり、祖母の遊佐が、零落した由比家の復活の望みを孫たちにかけて、教化に専念したという。さて彼は、神田小学校を経て高知県中学校を明治二十三年に卒業後、京都第三高等学校（旧制三高）に進んだ。明治二十六年七月に卒業、九月東京帝国大学文科史学科に入学し、明治二十九年七月に優秀な成績で卒業した。専門は西洋史学だった。¹⁰ 卒業と同時に、山口高等学校に勤務したが、ここが廃校となり、明治三十二年千葉県千葉中学校長に任命された。明治四十年第五高等学校（熊本）教授兼生徒監となり、又教頭職に就いたが、大正二年母校の第三高等学校に転任し、教授兼教務主任となった。こうした経歴を経て、大正八年四月、新しく出来る松山高等学校に初代校長として任命されたのである。四十九歳のときであった。

さて、由比質のこのような教育畑一直線の経歴を見る限りは、陸軍次官山梨半造と結びつくような気配はどこにもない。ところが、由比質には、十歳年上の兄由比光衛がいた。この兄が陸軍軍人になつていたことを知れば、話は違つてくるのである。次には、陸軍軍人の道を歩む兄由比光衛の経歴を見ておかねばならない。

二、青島守備軍司令官由比光衛

由比光衛（ゆひ みつえ）（一八六〇—一九二五）は、万延元年十月十五日に、土佐郡神田村（現高知市神田）に、土佐藩士由比光策の長男として生まれた。⁽¹¹⁾ 弟質は次男である。身体は小さかったが、光衛は読書に飽くと竹刀を持ち出して庭木や柱を打ちまくつたという。質実剛健、志操堅固に育つた彼は、明治十年幼年学校に入った。そして陸軍士官学校へ進み、明治十五年旧五期生として卒業とともに陸軍歩兵少尉に任官した。やがて中尉になつた後、明治二十一年に陸軍大学校へ七期生として入り、三年後の明治二十四年主席の成績で卒業、直ちに参謀の業務に就いた。

日清戦争（明治二十七年、八年）のときは第二軍の参謀として参加、戦後はイギリスに駐在し、加藤金権大使と共に活動した。帰国後北清事変においては広島第五師団参謀を務め、明治三十三年に陸軍少佐となつた。ついで日露戦争（明治三十七、八年）には第二軍司令部参謀副長として参加し、師団編成においては第八師団参謀長として働き、戦後大佐に進んだ。その後は弘前第八師団参謀長、近衛歩兵第一連隊長を経て、明治四十二年陸軍少将となつて水戸第二十七旅団長に、大正三年には陸軍中将となり、陸軍大学校長に就任した。大正三年丁度青島の日独戦争のとき、彼は軍務から離れていたことになる。しかし大正六年には近衛師団長、翌年のシベリア事変にはウラジオ派遣軍参謀長の職に就いた。そして帰国後の大正八年五月、由比光衛は軍人としての最後の要職、第五代青島守備軍司令官（大正

八年五月から大正十一年十二月まで)に就き、この年十一月二十四日に陸軍大将を極めたのである。

青島守備軍は、大正三年十一月から撤退する大正十一年十二月まで存続し、最高責任者は青島守備軍司令官である。

初代司令官は、日独戦争の最高指揮官であった神尾光臣中将がそのまま就いた。第二代司令官には大谷喜久蔵陸軍中将(在任中に大将に親任)、第三代司令官には本郷房太郎陸軍中将(在任中に大将に親任)、第四代司令官には大島健一陸軍中将(就き、最後の第五代青島守備軍司令官に、由比光衛陸軍中将、即ち松山高等学校初代校長由比質の十歳上の実兄が就いたのである。彼は¹³⁾大正八年五月二十八日司令官に就任した。弟の由比質が松山高等学校校長に任命されたのは、その一ヶ月前の四月十五日のことである。二人のほとんど同時と言つていい新しい職務が、元々仲の良かった兄弟を更に近づけることになるのである。

青島守備軍の最高司令官となった由比光衛は、守備軍のすべての状況を把握したのである。『大正八年以降青島鹵獲書籍二関スル件』一卷にまとめられた「鹵獲書籍」に関する全体は、まさに由比司令官が着任した年に始まったのである。大正九年二月二十七日付で陸軍省へ送られた青島守備軍司令部作成の「鹵獲書籍寄贈分配表」は、司令官監督のもとに準備されたはずである。また職務上当然のことながら、陸軍省次官とは頻繁に連絡のやり取りがある。二人の間の関係を知るために、軍人山梨半造の経歴にも触れておく必要がある。

三、陸軍次官山梨半造

山梨半造は、元治元年(一八六四)三月相模国(現神奈川県)に生まれた。¹⁴⁾由比光衛の四歳下である。山梨は明治十九年に陸軍士官学校を旧八期生として卒業し、直ちに歩兵少尉に任官した。陸士卒業は由比より三年後輩だが、卒

業後直ちに歩兵少尉任官という全く同じ軍歴を二人は歩み始めている。山梨は陸軍大学校を明治二十五年第八期生として卒業した。ここでは由比の一年後輩であった。つまり、二人は二年間は一緒に過ごしたのである。由比の七期生は卒業者九名、山梨の八期生は十七名だったから、二人が親しく付き合う時間は充分あったであろう。一年先輩の由比が主席卒業であったのだから、知らないはずはない。⁽¹⁵⁾

その後、日清戦争に山梨は第二軍副官として参加し、由比は同じ第二軍の参謀だった。戦後、山梨はドイツ駐在、帰国後は陸軍大学校教官になった。日露戦争においては山梨は第二軍参謀として参加し、このときは第二軍参謀副長の由比の下にいた。しかし師団編成では、由比が第八師団参謀長、山梨は第三師団参謀長であった。ちなみに、第二軍には、軍医部長に森鷗外(林太郎)軍医監、第二軍所属の騎兵第一旅団長秋山好古少将がいた。秋山は陸軍士官学校旧三期生で、由比光衛の二年先輩であった。また第三軍司令官は乃木希典大将であった。⁽¹⁶⁾

日露戦争後、山梨はオーストリア公使館付武官、ついでドイツ大使館付武官になっている。このときの経験が後に彼を青島の日独戦争へ導いたのかもしれない。というのは、山梨はドイツから帰国後、歩兵第五十一連隊長、歩兵第三十旅団長、参謀本部総務部長を経て、大正三年八月独立第十八師団参謀長として、青島のドイツ軍攻略に向かったからである。十一月七日ドイツ軍陥落の日には直ちに、参謀長山梨少将は全権委員としてドイツの全権委員ザツケセル大佐と会見し、青島開城規約書の調印を果たした。⁽¹⁷⁾その後山梨は大正五年に中将に進み、教育総監部本部長に就いた後、大正七年田中義一陸相の下で陸軍次官となったのである。

こうして由比光衛と山梨半造の軍歴を比べてみると、二人の関係はかなり近かったとも見える。由比光衛は青島守備軍司令官に就いた大正八年に陸軍大将に進み、山梨半造は大正七年に陸軍中将として陸軍次官になっていたが、由比の二年後の大正十年に陸軍大臣に任命され、その年に陸軍大将となった。そして二人はそろって勲一等旭日大褒章

を受けているのである。大正十一年十月十一日、弟の由比校長は寄贈圖書の礼状を今度は陸軍大臣山梨半造に書いている。つまりは、由比校長にとつては面識のあつた山梨半造への書簡が大事だつたことがわかるのである。新設高校の校長として洋書の少なさに苦勞している弟の状況を知つていたであろう兄が、司令官として鹵獲圖書の分配計画に深く関与する中で、弟に何らかの指示を与えた可能性は、なかつたとは言えないだろう。由比校長が書いた陸軍次官山梨半造への二通の手紙に、このような背景を重ねて見れば、先に述べた疑問は氷解するであろう。由比質が山梨半造と面識を得たのがいつのことかは明らかでない。しかし、二人を引き合わせたのが軍人の兄由比光衛であつたことは、間違ひなからう。

大正八年春由比兄弟がそれぞれ新しい職務に就いたとき、二人とも青島と関わり、そこにある鹵獲書籍としてのドイツ圖書に向き合うことになる。山梨半造はそのとき陸軍次官に就いており、青島からは離れていたが、すでに見たように彼もまた青島とは深い関わりを持っていた。由比兄弟と山梨半造の三人は青島の鹵獲書籍において再び結びついたと言えるのである。

しかしそれにしても、「本校は目下新設に際し図書類整備の急需を感じ居り候えども、予算に制限ある上近來物価騰貴の影響を受けて、図書類の購入募集には大いに困難しおり候」と訴える由比校長の言葉には、何か切羽詰まつたものが感じられる。このとき松山高등학교はどんな状況であつたのだろうか。

第五章 松山高等学校

一、松山高等学校の誕生

松山高等学校の創立は、大正七年三月第四回帝國議會において、新潟、松本、山口、松山の四高等学校新設が承認されたことに始まる⁽¹⁸⁾。それ以前の高等学校の歴史に触れておけば、明治二十七年（一八九四）に公布された「高等学校令」によつて、第一高等学校（東京）を筆頭にナンバーズが次々に誕生したが、明治四十一年（一九〇八）に第八高等学校（名古屋）の創立で動きが止まった。その後、高等学校増設の運動が再び各地に高まったのは、第一次世界大戦（大正三年の日独戦争）後の好景氣を迎えた頃であつた。大正六年十二月には愛媛県の高校新設がすでに内定していた。かくして大正八年三月に文部省令「高等学校規定」が公布され、四月十五日に第三高等学校（京都）教授由比質が松山高等学校初代校長に発令され、十六日には「本年九月より授業を開始する」ことが文部省令によつて公布されたのである。

由比はさっそく、翌十六日に開校準備作業を開始し、五月中に三名の事務部門定員を充足し、六月一日に松山市公会堂（萱町）を借り受けて仮校舎とし、十七名の教職員を揃え、七月六日より第一回入学試験を松山中学校校舎で実施し、全国からの志願者九八六名の中より定員一六〇名（文科・理科それぞれ甲・乙の四学級）を決定し、二階建て松山市公会堂の仮校舎内部に、四教室、教官室、校長室、事務室、講堂兼図書室を設けた。更に、九月一日制定の「松山高等学校規則」第二四条「新入生は総てこれを寄宿舎に収容す」を実施するため、市内古町の松山藩主菩提寺大林寺を借り受けた。かくして大正八年九月十一日に第一回入学式が行われ、翌十二日から第一学期の授業が開始された

のである。しかしながら、松山高等学校の船出は決して順調ではなかった。

なによりもまず、高校設立は国が決めたものの、設立経費は地元負担であったのである。学校用地は地元の寄付により、設立の総経費は七十五万六千二百円だったが、そのほとんどが愛媛県の官民からの寄付でまかなわれたのである。『海南新聞』の記事によれば、愛媛県に高校新設内定段階の大正七年五月八日、「高等学校建設に対する本県よりの寄付金については六日午後三時より県公会堂に於いて高校期成委員会を開きたる旨は既報の通りなるが、本県よりの寄付額は約六十萬円にして内四十萬円は松山市付近を除きたる県内外有志の寄付。十萬円は松山市及び付近郡部の寄付に待つこととし、残額は県より支出するよう内定を遂げ」、五月三十日には、「高等学校設置に就き松山市に於いて七萬五千円の寄付負担を受けたことは既報の如くにして、市議員一同は協力して寄付勧誘衝に当たることとなるが、之に関し更に高等学校創設援助会を設立せんとすの長井市長の發案により二十九日の市会閉会后一時間余に亘り協議の結果いよいよ左記八カ条の規定を承認し着々その歩を進むることとなれり」と順調に進むか見えたと、翌八年六月、高校受験者の数も発表されたというのに、二十四日、松山市は「寄付いよいよ行詰まり」の見出しが出ている。募金活動はなかなか難航したようである。新設高等学校の船出は経済的には厳しいものだったのである。

さて、由比質校長はいかなる校風を目指し、また全国から集まり寄宿舎生活に入った一六〇人の若者たちは、いかなる勉学を始めたのだろうか。第一回入学式の時、壇上に立った由比校長は次のような訓辞をしたという。「諸君は高等学校に入学した以上将来国士となるべき者だ。私は諸君を国士をもつて待遇する。諸君は国士をもつて任じなければならぬから万事束縛なく自由に事に処することができる。但し自分の行動に対しては責任を飽くまでも果たなければならぬ⁽¹⁹⁾」。

「我が松山高等学校の初代校長由比先生は、土佐出身の豪毅で闊達な方であった。既に五高、三高の教授を歴任し

て、高等学校の教育については深い経験と高い識見を持っておられ、この機会に南海の新天地に自分の理想とする高等学校を作り上げるべく、信念と情熱を以つて松高の運営に全力を尽くされたのである。先ず傘下には立派な才能がありながら天下に志を得ていない異色ある俊英な教授連を集められ、全国各地から入学した青年学徒には徒に点取り虫にならず、真に社会に役立つ立派な人材となるように訓育されて、自由で友情に富み進取的で男性的な校風を養われたのであつた。そして「松高ユーバアルレス」の標語を掲げ、新設といえども何処にも勝る高等学校を目指されたのであつた。⁽²⁰⁾これはある第一期生の記憶に残る由比校長像であつた。

しかるに、一ヶ月も経たぬ十月初めに、羽目をはずした学生たちが夜な夜なデカンショ節を放吟して世間のひんしゆくを買い、新聞の記事にもなる騒動が起こつた。「私たち第一回生の場合、四国に初めて出来た最高学府の学生であるとの自負から、天にも昇る意気をもつて深夜の市中をストームするなど、静かな松山の市民を震撼させ、新聞は「高等学校ではない放蕩学校だ」とまで書いたのである。しかし由比校長は私たち青年学徒の気持ちをよく汲まれ、剛腹な性格で善処され、私たちが自由な活気ある校風の下に伸び伸びと成長するよう訓育されたのであつた。⁽²¹⁾」

何もかも借り物づくしの中でエネルギーをもてあましていたのであるうか。一日も早く校舎を建て、学生寮も建て、図書室も整え、図書も充実させて、学生たちを勉学に集中させてやりたい由比校長の思いを誰が知るであらう。学校予算に余裕のあるはずがない。図書予算があつたであらうか。仮校舎の図書室にはいったい何冊の書物が準備されていたのだらうか。

二、松山高等学校に届いた「寄贈図書」

由比校長が陸軍次官に図書寄贈の情願書を書いたのは、高校創立一年をまちかにした大正九年七月九日だった。それは、持田に新校舎が完成し、八月二十三日に公会堂の仮校舎から引越しをする目前であり、九月一日には二回目の入学式を迎えて総数三一六名の学生たちとなる日が迫っていた時であった。「図書の種類は和漢洋その専門科別等何れにてもよろしく」、また「欲張り」を言うようだけれども、「一部にても多数を希望したし候」と校長は書いた。嘗ての面識を頼りに、同じ日に二通もの書簡を、同じ陸軍次官に書いた。これに対する陸軍次官の返事は、「ある程度まではご希望に応じ得る」として、その予定は「五二三冊」であった。

待望の図書が学校に届いたのは、それから二年後の大正十一年九月のことである。愛媛大学図書館に残る『松山高等学校図書寄贈図書登録原簿』には、九月八日付寄贈者名「Headquarters of Tsingtao」と記入しており、冊数は「三八四冊」であった。二年前の予定数より百冊以上減っている。それはおそらく、大正九年四月に設立された水戸、山形、佐賀の三高等学校が、新たな寄贈先として追加されたことと関係しているかもしれない。この三校が何冊寄贈されたかはわからないが、初めに予定されていた十二高等学校から少しずつ減らして、全十五校の冊数が「同一程度」になるように分配したはずだからである。

三、 由比校長の礼状

由比校長は、寄贈図書の届いた一カ月後の十月十一日、山梨半造宛に礼状を書いている(写真4)。

受領番号「第一三三五号 其二」「十月十六日」

大正十一年十月十一日

松山高等学校長 由比 質

陸軍大臣 山梨半造殿

拝復 時下益々御清穆ノ段幸慶ヲ賀シ候然レバ日独戦役記念ノ為青島守備軍司令部ニ於テ鹵獲サレタル書籍中左記ノモノ同司令部ヨリ此程当校へ御寄贈下サレ候段本校ノ為幸慶ノ至リト幸存シ候。本件ニ関シテハ種々御幹旋下サレ今日アルヲ將ニ御厚意ト有難ク幸ヲ深謝致候。右書籍ハ永ク本校ニ保存ノ上研究ノ資料ニ供スべく候。先ハ略儀ナガラ御礼申シ述度斯如クニ御座候

敬具



(写真4)

「日独戦役記念ノ為青島守備軍司令部ニ於テ鹵獲サレタル書籍中左記ノモノ同司令部ヨリ此程当校へ御寄贈下サレ愛媛における日独関係史「青島守備軍司令部」寄贈ドイツ図書と旧制松山高等学校(後)

候段本校ノ為幸慶ノ至リト幸存シ候」。青島守備軍司令部（司令官は実兄由比光衛陸軍大将）から届いたこの鹵獲寄贈書籍に対し、由比校長は、すでに陸軍大臣となつていた山梨半造に礼状を書いた。寄贈主は青島守備軍司令部であるから、司令官たる由比光衛宛に礼状を書いたかどうか、その記録は残っていない。由比校長は山梨半造に頼んだのだから、彼に礼状を書いたのである。東京帝国大学総長と東北帝国大学総長は、日独戦争終結後日本軍がドイツ圖書を鹵獲したことを、いち早く知つていた。東北帝大総長は大正四年十二月に青島守備軍司令部宛鹵獲書籍分与の書簡を出している。早すぎる程の行動である。しかし由比質が鹵獲圖書のことを知つたのは、彼が松山高専学校初代校長に赴任した後、学校の図書がないに等しい状態のなかで思案に暮れていたとき、大量の鹵獲書籍を保管している守備軍の司令官になつた兄からの情報に違いないと推察される。先に述べたように、大正九年に入つてから司令部が「分配表」を作成し、寄贈先には高等学校をすべて入れた。しかし陸軍省は寄贈先の検討に手間取つていた。この事を兄は弟に伝えたのではなからうか。由比光衛は私利私欲に恬然として公私の別には厳しかったが、また子沢山の弟質の家庭の面倒をよくみてやつたという話が残つて²⁴いる。陸軍省の行動には守備軍司令官と言えども口を挟むことは出来ない。弟に嘆願書を書くよう勧めたのは兄だったかもしれない。陸軍大臣宛ではなく、かつて弟を引き合わせたことのある陸軍大学の学友でもある山梨半造陸軍次官宛に書くことも。届いた書籍数は予定よりかなり減らされていたにしても、発足後間もなく、圖書を待ち望む大勢の学生達を抱えていた校長の由比にすれば、努力の甲斐があつた喜びを抱いたであろう。「本件二関シテハ種々御斡旋下サレ今日アルヲ将ニ御厚意ト有難ク幸ヲ深謝致候」

青島から届いたドイツ書籍は、現在愛媛大学図書館の松山高専学校図書書庫に静かに眠っている（写真5）。「右書籍ハ永ク本校ニ保存ノ上研究ノ資料ニ供スベク候」由比校長の言葉は、決して社交辞令ではなかつた。彼は校長に任命されて初めて松山に来たとき、県庁で記者達に語つてゐる。「松山に出来るとすれば、愛媛県否四国の高等教育が

普及される訳で、「四国大学も設立するという按配になりたいたいものです。」（『海南新聞』大正八年四月三十日）土佐出身の彼としては将来の姿を大きく四国大学と表現したのであるが、松山高等学校は愛媛大学に発展継承された訳である。由比校長の言葉通り、寄贈図書は永く保存され研究の資料として役に立った。ドイツ書籍も大学図書館へ移籍し、その一部は文理学部独文研究室へ移った。私の研究室にあるヴェルヘルム・ラーベの『作品集』二冊は、かくして法文学部独文研究室に引き継がれて、今日に至っているのである。

由比質松山高等学校初代校長は、松山に永住するつもりで新居を構えたが、その直後の大正十四年四月、第七高等学校造士館長（鹿児島）へ転任の命が下り、そして六年後、昭和五年四月、講演中に突然倒れ四月七日に他界した。享年六十歳であった。

兄の由比光衛陸軍大將は、大正十一年十二月に青島守備軍司令官を退いた後、陸軍参議官となり、翌十二年待命、予備役に入ったが、二年後の大正十四年九月、六十六歳で世を去った。

また山梨半造陸軍次官は、大正十年六月原内閣の陸軍大臣に就任、その後は軍事参議官、大正十四年には予備役に編入された。昭和二年朝鮮総督に任ぜられたが、二年足らずで辞職し、以後は公職に就かず、昭和十九年七月、八十一歳で没した。



(写真5)

注

- (1) 愛媛における日独関係史―青島守備軍司令部―奇贈ドイツ図書と旧制松山高等学校(前) 愛媛大学法文学部論集 人文学科編第十七号(平成十六年九月) 四頁参照。(以後「旧制松山高等学校(前)」と略す)
- (2) 「旧制松山高等学校(前)」の第一章「大正八年以降青島函獲書籍二関スル件」三頁以下参照。
- (3) 前掲書 五頁以下参照。
- (4) 前掲書 八頁以下参照。
- (5) 「大正八年以降青島函獲書籍二関スル件」(防衛庁防衛研究所図書館蔵)
- (6) 「旧制松山高等学校(前)」一七頁以下参照。
- (7) 前掲書 一九頁参照。
- (8) 前掲書 二〇頁以下参照。
- (9) 『稿本鴨田地区史 人物編三』広田貞喜・甲藤勇編集発行(昭和四十四年九月)一〇―一四頁「令名高き教育家由比質」参照。
- (10) 「松山高等学校創立六十五周年記念 真善美」松山高等学校同窓会発行(昭和五十九年四月八日)九二―九四頁、「亡父由比質のこと」(由比直一・二回理甲)参照。
- (11) 『稿本鴨田地区史 人物編三』二―一〇頁「呱呱大将の声 由比光衛」参照。
- (12) 「日露戦争戦闘序列 陸軍編」HP: <http://homepage1.nifty.com/kitabatake/rikukaigun-nihiro.html> 参照。
- (13) 「歴代青島守備軍司令官」高知大学 瀬戸武彦作成 HP: <http://homepage3.nifty.com/akagaki/seio4.html> 参照。
- (14) 『日本近現代人名辞典』臼井勝美他編 吉川弘文館(平成十三年)一一〇九頁以下参照。
- (15) 「陸軍大学校卒業者数及び主席卒業者一覧(一期―二十期)」HP: <http://www2.wbs.ne.jp/ms-db/other%20data/rikugun-daigaku1.html> 参照。
- (16) 注(12)参照。
- (17) 『青島戦記』山口信雄著 大阪朝日新聞社(大正四年一月)一五三頁参照。

- (18) 『松山高等学校創立六十五周年記念 真善美』松山高等学校同窓会発行（昭和五十九年四月八日）二頁以下、「松高創世記」（島津豊幸・二十九回文甲）参照。
- (19) 前掲書五頁参照。
- (20) 前掲書五八頁「第一回生の感激」（壇野富士雄・一回文甲）参照。
- (21) 右同所。
- (22) 「旧制松山高等学校（前）」二〇頁参照。
- (23) 金沢大学の志村恵氏が行った函獲書籍調査によれば、高等学校でわかっているものについて言うと、新潟高等学校に三二八冊寄贈（分配表では四八九冊だった）、第四高等学校（金沢）に三三七冊寄贈（分配表では三八八冊）、松本高等学校に三三七冊寄贈（分配表では四二七冊）となっている。残念ながら追加された水戸、山形、佐賀三校については全く不明である。志村恵「日独戦争と青島函獲書籍」（金沢大学独文学研究会『独文研究室報』第十八号 二〇〇二年三月三十一日発行 二二六頁以下参照）。
- (24) 注（11）六頁参照。

最後に、由比兄弟に関する資料を頂いた高知大学の瀬戸武彦氏にお礼を申し上げます。